
スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

【Nコード】

N9347Y

【作者名】

えーさく

【あらすじ】

システムXNの生んだ次元断層に巻き込まれ死んだ1人のヲタクは、神に転生を提案された。ヲタクは次元断層の先の世界を選択し、転生した。「極めて近く、そして限りなく遠い世界」そんな世界にやって来てしまった主人公の運命や如何に？

プロローグ

人生何が起こるかなんてわからない。

そう、わからないという絶望だらけ。

明日に希望も持てず、情眠を貪る日々を送る。

某悪夢少佐みたいな人が居れば喜んで起き上がりますが……。

「これは夢だ……」

「残念ながら夢ではない」

呟く自分にそう言ったのは、悪夢少佐の上司。閣下だった。

「ジーク・ジオンッ!!」

「ジーク・ジオン!」

やったら応えてくれました。感動で死ねそう。

「さて、急で唐突だが、真実を述べれば、貴公は死んだ」

「そーなのかー」

うん。はい。死んだそうです。

確か今日はDVDを返しに行つて……

「所謂転生トラックに追突されて貴公は死んだ——わけではな
い」

「あうえー!?ならどーして?」

確かにトラックに追突された覚えはないけど……。

「実はな、次元断層に巻き込まれて死んだのだ」

「次元断層Σ!?!」

まさか三次元リアルで次元断層なんて——

「げ、原因とか……何なんですか?」

「ふむ。システムXNの影響による次元断層が、貴公の前に現れた
のだ」

そんなのアリ？

「本来なら死ぬべきでない貴公であつた。故に貴公には転生してもらう」

死因はアレなのに、ちゃんと転生させてくれるの？

や、その前に――

「閣下は神様なのですか？」

「うむ。貴公のいうように僕は神だ。この姿は貴公との会話にあわせて用立てたものだ」

ああ、そーなのですか。

でもいきなり転生なんていわれても――

あ。

「次元断層の先には、世界はあるのですか？閣下」

「ん？ああ、貴公の地球ではない地球がある」

「ならそこをお願いいたします」

「良いのか？」

「はい。それで構いません。あとはそちらにお任せします」

「そうか、だが良いのか？貴公自らが選んだ能力を付随することもあるが」

「それは閣下のさじ加減にお任せします。それに、下手に欲張ってしまいそうですから」

「ふむ。委細承知した。貴公の次生に幸あらんことを祈る」

「ハッ！有り難き幸せ。御世話になります、閣下！」

敬礼を閣下にとすると、急に眠くなってきた。

うつ、か、つ、かの前で、寝るわけ、には――

第1話 招かれた異邦人・エトランゼ・

極めて近く、そして限りなく遠い世界の地球。

異星人の襲来を退け、平和が続く世界に、1人の来訪者が訪れた。

「——き——ろ——お——きろ——」

「んむう……あと5分……」

「起きろ——!」

ゲシッ

「あうっ——! い、いったあ——い——! もう——! いったいなんなのさあ——!」

僕は睡眠を邪魔されたことに腹を立てて、僕を叩き起こした人物に怒鳴った。

「それはこちらのセリフだ。いったいどうやってこの部屋に入った。どこの所属だ、貴様」

寝ぼけ眼が晴れて、僕の目の前には怖い目つきの赤い髪のおにーさんが拳銃を僕に向けていた。

はて？これいかに？

「聞こえなかったのか？所属と目的をさっさと吐け」

所属？目的？

え？このおにーさん、何を行ってるの？

てゆーか、僕は誰？

「目的？んんん、わかんない。所属もなにも、僕は——ああ、太陽系第3惑星在住、きゃっ！！」

「ふざけていないでキリキリ吐け、俺もあまり堪え性のある方ではないからな、これがな」

ベッドに押し倒されて首筋にナイフを当てられた。ちなみに手足は長袖シャツで縛られてる。

——シュン

「アクセル、今日はブリーフィングがあるからって昨日言った…わ

……よね……」

脇目で見ると、女の人が部屋の出入り口で固まっていた。

「あら、お邪魔だったようね。ヴィンデルには貴方は遅れるよう言
っておくわ」

「待てレモン。侵入者だ、コイツは」

「あら、可愛い侵入者ちゃんね」

女の人が僕達の方に来てきた。

「初めまして、お嬢さん。私はレモン・ブラウニング、よろしくね。
こっちのこわいおにきさんは、アクセル・アルマーよ」

「レモン……」

「いいじゃない。で、貴女の名前は？」

「えーっと……わかんない。うん。誰なんだろ？僕」

「記憶喪失？」

「わからん。ふざけているだけかもしれん」

「ふざけてないよ」

「貴様は黙っている」

「ううっ」

このおにーさんは怖いよ……。

「そんなに睨んじゃダメよ、アクセル。一応検査その他諸々はコッチでやるから、貴方はブリーフィングに行って」

「わかった。だが——貴様、下手なマネはするなよ」

「……はい」

部屋を出て行くアクセル。

「さ、ついて来て」

「はい……」

「大丈夫よ。取って食いはしないから」

「うん」

僕はレモンのあとについて部屋を出た。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

普段ブリーフィングに遅れるなんてしないアクセルが珍しく遅れてたから様子を見に来たのだけれど、フフ、傍目から見たらアレはなかなかに危ない絵だったわね。

「レモン、どこまで行くの？」

「もう直ぐそこよ」

小さい子と話す機会なんて殆どないから、新鮮ね。

「さ、私のラボによっこそ」

「ほえー！すくすくいいー！」

フフフ、素直なイイ子なのね。

「さ、服を脱いでもらえる？これからいろいろ検査させてもらうから」

「はい」

服というよりピッタリしたボディスーツのような物とマントを脱ぐ、というよりぽんぽん脱ぎ捨てるように脱いでいくあの子。

「男の子だったのね」

「ん？なに？レモン」

「なんでもないわ。それとこれから溶液を満たして検査するけれど、呼吸は出来るから」

Wシリーズの調整槽に彼を入らせ、酸素マスクをつけさせる。

あとは端末を操作して調整槽に溶液を満たしていく。

本当に素直でイイ子なのね。私の言ったことを正直に信じて、全く不安がらないもの。

「じゃは……」

興味本位で調べてみたけれど、スパイよりよっぽど厄介だわこの子。とりあえずDNAデータは部隊のIFFに登録しておかないと、あの子達が侵入者と間違えるから。

それにしても、念動力者を手元に置けるのは嬉しい限りね。

となると、ヴィンデルにも言わなければならないわね。っと、その前にこの子に名前をつけてあげないと。

「奇遇……偶然……いえ、運命……フェイト……フェイトにしましょ」

フェイト・ブラウニング。

そう呼びましょ。

「フェイト、もう終わったから、出ていいわ」

「フェイト？」

「そう、アナタの名前は今日からフェイトよ」

「フェイト……フェイト……僕が……フェイトか……」

あら、喜んでくれるかと思ったら、なんか考え込み始めちゃったわ。

「もしかして、フェイトはイヤだったかしら？」

「うん。そんなことないよレモン。ありがとう」

直ぐ、直視するには無邪気で綺麗過ぎる笑顔を向けてくれたけれど、あの顔は、自分がその名前を名乗っていいのかどうか悩んで見えたわね。

本当の名前があるかどうかで悩んでいたけならいいのだけれど。

[illegible]

フェイト・ブローニング

レモンが僕につけてくれた名前。

でもフェイトって聞いた時に、僕がこの名前を名乗っていいのかどうなのか、考えてしまった。

理由は僕がフェイトにそっくりだった。でも僕はフェイトとは全然違うから、その名前を名乗っていいのか悩んじゃった。

でもレモンが考えて、たまたま名前がフェイトになったんだったら、まあ、良いかな？って、思えたんだ。

それに嬉しかったし。

レモンはヴィンデルっていう人に報告があるからって、僕をアシエンに任せて行っちゃった。

アシエンはアンドロイドで、全身に武器がいっぱいついてるんだ！

ワイヤード・フィストもついてるんだって！

エステバリスだよ！スゴいよ！カッコいい！！

やあ、レモンは漢の浪漫がわかるくちだよ。

あとでバルディッシュ造ってもーらお！

「アシエン、次はどこ行くの？」

「ふむ。あらかたは見せてしまったからな……少し待て。レモン様——」

アシエンはアンドロイドだから通信だって出来るんだ。

レモンに言ってKOS・MOS造って貰おうかな？

「――許可が降りた。格納庫に向かうぞ」

「はい！……で、格納庫ってなに？」

「行けばわかる」

アシェンに手を引かれて、いくつもの角を曲がったり、扉を潜って着いた格納庫には――

「おお~~~~~！！すつごお~~~~~いつ！！」

そこにはMSくらいのサイズのロボットが所狭し寿司詰めで並んでいた。

「ねーねーアシェン！アレってなんなの？」

「パーソナル・トルーパー――通称PTと呼ばれる人型機動兵器だ。アレはそのPTの内の1機、量産型ゲシュペンストMk-？。PTの開祖とも言えるゲシュペンストMk-？の直系の機体だ」

「へえ……なんか強そう。こう、殴ったり蹴ったりとか強そうだね」

「確かに、ゲシュペンストは汎用機だが、そういう使い方もある」

「ふん。ねえ、あっちの灰色で背中にフライトユニットとビーム砲みたいなの積んでるヤツは？」

「アレはエルアインス。最新型の量産型PTだ。分かり易く言ってしまうと、究極の汎用機だ。お前の言ったとおり、背中のツイン・ビームカノンによる遠距離から、手持ち火器による近々中距離戦闘をそつなくこなせる汎用機としては理想的な機体だ」

「成る程、特徴が無いのが特徴な機体なんだね」

「なんだそれは？」

「つまりバランスが取れ過ぎてて、あげるべき特徴がないって事さ」

「なるほど、確かにそういう意味では特徴はなくバランスは取れている機体がアレだ」

ゲシュペンストはちょいスマートなドムで、エルアインスはジム・カスタムとジム・キャノン？のハイブリッドな機体なんだね。

その他にもファンネルを積んでるアシュセイバーとか、変な形のリオンっていうAMも見せてもらったんだ。

で、気になるのが……。

「アシェン、アシェン、シミュレーターに乗りたい！！」

ここまで来てシミュレーターやらないヤツは男じゃないよ！

「少し待て。…レモン様——」

楽しみだなあ……ワクワクするよ！

ビーン！…ビーン！…ビーン！…ビーン！…ビーン！…ビーン！…

ズドーーーーンッ！！

『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』
『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』
『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』

「わわわわ！？なに、なに、なにΣ！？」

「敵襲！？」

『総員第一戦闘配備！！繰り返す！総員第一戦闘配備！！』

『DC残党の襲撃を受けた！PT部隊、スクランブル！！』

「アシェン！」

「来いフェイト！」

地響きと振動の中、アシェンの方に走る！

ピキーンッ！

「うっ！」

頭に強烈に『嫌な予感』がした。

するとアシェンが僕に駆け寄って来て、僕を押し倒した。あ、アシェンって少し胸控え目だけど結構あるし柔らかいし温かいんだ。アンドロイドとは思えないって――

僕が口を開こうとした瞬間。鼓膜が破れんばかりの轟音と眼を灼き尽くさんばかりの閃光と肌を焼かんばかりの熱風に襲われた――

第1話 招かれた異邦人・エトランゼ・（後書き）

とりあえず1話目です。

ちなみ外見がアホの子ですが、中身はそれなりにしっかりしながらも素直で正直者で精神的に退化？してます。

よろしければ感想ください。

フェイト・ブラウニング（前書き）

主人公のアホの男の娘。 フェイト・ブラウニングの設定です。

フェイト・ブラウニング

フェイト・ブラウニング

所謂転生者で元自宅警備員。

フェイト・ブラウニングという名はレモンからつけてもらった。

容姿はリリなの雷刃の襲撃者・レヴィ・ザ・スラッシャー・そのままで、肉体に引つ張られるのか、時たまアホの子になる。性別は男の娘。

アホの子、素直過ぎる子ではあるが、中身がヲタクの為、突発的発想力や物事の見通しはそこらの科学者や指揮官より上。

不自然が起きないように、生前の自らの記憶、OGシリーズ、マテリアルズ関係の記憶だけがぽっかりなくなっている。しかし特定条件を経ると思い出される。

パイロット能力

「格闘」：138

「射撃」：124

「命中」：145

「回避」：210

「防御」：98

「技量」：155

「SP」：64

性格：熱血

地形適応

空A 陸S 海C 宇S

エース

移動力+1、回避率+10%、クリティカル率10%、格闘武装での与えるダメージ+20%

精神コマンド/直感、熱血、気合、不屈、集中、魂

特殊技能

SP回復、念動力L5、アタッカー、集中力、インファイトL7、気力+（回避）、気力限界突破、見切り

第2話 極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥（前書き）

少し加筆修正

第2話 極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥

「いったたたた——」

どれくらい意識がなかったのか、頭がぐわんぐわんする。

怪我は……してないのかな？

って、そーだよー!!

「アシエン！」

僕を爆発から庇ってくれたアシエン。

爆発の衝撃でシステムダウンしてるのか、アシエンに動きはない。

「アシエン！アシエン！！」

「——う——く——」

「アシエン——！」

「——だい——じょう——ぶ——だ——」

眼を覚ましたアシェン。でもその顔は険しい。

「アシェン、なにがあつたの？」

「わからん。だが、状況から見ると、この格納庫が攻撃されたのだろ。基地襲撃時は先ず敵の戦力を可能な限り潰すのがセオリーだ」

「なるほど……。アシェン、動ける？」

「問題ない。——と言いたいが、左脚のアクチュエーターに機能障害がある。おそらく爆発の影響だろう。無理をすれば動けるレベルだ」

「無理をすれば……。ね」

「フェイトに怪我はないか？」

「うん。アシェンが守ってくれたからね！」

「そうか」

僕の答えにそう言ったアシェンは、腕を床について上半身を起こす。僕も起き上がって、マントについた埃を払う。

「うわぁ……。ぐちゃぐちゃ」

「瓦礫の下敷きにならなかったのは幸いだっとな」

僕がさつき見た格納庫とは180度様変わりでぐちゃぐちゃ。PTも何機かしか生きていない。

「どうしよう、アシェン」

「……未だ戦闘は続いている。生身で行動するのは危険だ。PTでここを脱出、本隊と合流する」

「らじゃー!」

「良い返事だ。待っているフェイト、使える機体を探してくる」

「わかった」

片足を庇うように立ち上がったアシェンは、足を引きずりながらPTの方へ歩いていった。

「う~~~~ん」

特にやることもないから辺りを見回してみるけど、やっぱり今が戦闘中なんて実感が湧かない。

でも遠くだとまだ爆発音が聞こえる。

ピーンッ！

「うっ、また……」

何故かわからないけど、何かに引き寄せられるように、僕は足を進めた。

瓦礫を乗り越えて進んだ先には、爆発してめちやくちやの格納庫の中にあっても、何者にも穢されないかのように佇む1機の黒いPT。

「…ゲシュペンスト…じゃない。…ヒュッケバイン……違う、でも……」

ふと頭に浮かんだフレーズを勝手に口にしていた。

僕は迷わずPTに駆け寄った。装甲をよじ登ろうとすると、PTが勝手に動いて、その手で僕を掴むと、コックピットまで上げてくれた。

僕がコックピットに飛び込むと、ハッチが閉まる。

暗くなったコックピットに薄暗く光りが灯る。

「どうしてだろ？触ったことないのに、動かし方がわかる」

半分勘に近い確信でボタンを押していく。

モニターにS・SRXと、表示された。

ピーンッ！

「くうっ！！」

いきなり頭痛がしたと思ったら、このPTの動かし方が少しずつわかっていく。まるで、情報をインストールされるように。

「なんだかよくわかんないけど、いくよ！ヒュッケバイン！！」

フェイトがヒュッケバインと呼んだPTのツインアイに光りが灯る。

フットペダルを踏み込み、機体の推力を上げてジャンプ。

「テスラ・ドライブも搭載されているのか……なら、飛べ！ヒュッケバイン！！」

黒煙を抜けた先は、戦場だった。

[illegible]

「くっ、よくまあこれだけの数を……」

愛機のアシュセイバーを駆りながら、アクセルはDC部隊の兵力に顔をしかめる。

異星人との戦争後に決起したデッバイン・クルセイダーズ——通称DC。

しかしその総帥、ビアン・ゾルダークは討たれて久しい。にも関わらず、未だDCは活動している。

しかしそこにはピアン・ゾルダークが掲げた意志や理想は無く、ただ戦うことだけを行う武力組織でしかない。

何故DC残党が未だに活動をしているのか、それは未だ副総帥が生きていて、地球の何処ぞに大規模な拠点を構えているのだろう。と言うのがヴェインデルの読みだ。

今回基地を襲ったDC部隊も、その構成も数もしっかりしている。連隊規模のリオンやランドリオンだけでも厄介だというのに、バレリオンも大隊規模で出張ってきている。

複数だがガーリオンとヘビィ・バレリオンも混じっている。

対するこちら側は、奇襲された上、格納庫もいくつか潰された為、量産型ゲシュペンストMk-?、エルアインス、ランドグリーズ、量産型アシュセイバーが全機で約30機。キルレシオ、技量、機体性能はこちら側にあるが、勢いと物量は向こうにある。

今は拮抗しているとはいえ、早く態勢を整えなければ、本気でこちらを潰しかかっている連中に押される上、もたもたしていればヤツ等が此処にくる可能性もある。それはDC以上に厄介だ。いや、厄介の範疇ではない。

「く、あまり時間はかけていらねん！ハルバート・ランチャー、発射！」

上空のリオン部隊へハルバート・ランチャーを撃つアクセル。

ビームは回避に鈍い4機のリオンを墜とすが、焼け石に水感が否めない。

「チツ、こうでは数が減らん」

再度ハルバート・ランチャーを撃とうとしたところで新しい熱源反応が出た。

破壊された格納庫から上がる黒煙から飛び出す1機の機体。

「あの機体は——誰だ、誰が乗っている!？」

シャドウミラーに配備されている唯一の特機にして鉄屑の機体。動力調整が極めて不安定な欠陥品で、今まで2、3度しか戦闘にしか出していない機体。

「S・SRX! 誰が乗っている。IFF……フェイト・ブラウニング……さっきの餓鬼だと!？」

「我が名はフェイト!! フェイト・テス——あ、間違えた! つ、ゲフンッゲフンッ!——我が名はフェイト!! フェイト・ブラウニング!! 我は、悪を断つ剣なり!!」

空中で直立腕組みで滞空し、オープンチャンネルと外部マイクでとつともなく有名な見得をきる存在に、戦場の時間が止まる。

「アシエンを怪我させた悪者は、僕のヒュッケバインでバイーンってぶっ飛ばす!!」

S・SRXは加速し、右手に若葉色の光りを集中させる。

「あれは!」

アクセルは驚く。その現象を知っているからだ。

「破を念じて、刃と成れ——いっくぞお——！必殺ッ——！」

標的は固まる1機のリオン。

「T・LINK・ブレードナツコオ——！」

左手から発したT・LINKブレードによって袈裟斬りから右斬り上げ、そこから念動フィールドを纏ったT・LINK・ナツクルでアップー、機体制御を失い、落下するリオンにトドメの右ストレートでT・LINK・ブレードを打ち込む！

「念動爆碎ッ——！」

フェイトの掛け声とS・SRXが拳を握ると共に文字通りリオンは爆碎した。

「はは！凄いで強いぞカツコイ——！強くて凄くてカツコイ——！……そう、ボクってば最強だね——！」

準特機であるS・SRXを最危険ターゲットとみなしたのか、リオン部隊の大半がS・SRXに向かう。

「うわわわっ！あ、危ないじゃないか！それにこういうヒーローとか新型が登場した時は、悪者は一方的にやられるのがじょーしきなんだぞー！」

「（そんな常識があるか……）」

あまりのアホさ加減に呆れるアクセルだが、確かにS・SRXの登場で戦場の流れは変わったのは事実だ。

「こちらも、もたつくわけにはいかな、こいつがな。行けい！ソードブレイカーー！」

「天上天下アー！念動破碎剣ッ！」

ソードブレイカーによるオールレンジ攻撃と、S・SRXが投擲したT・LINKソードやエルアインスの活躍により、リオンはあらかた撃墜される。

「ガーリオンはこちらに任せる。貴様は——」

「応ー！狙うは、大将首！」

複数居るガリオンに比べ、安全な長距離から攻撃するヘビィ・バレリオン。部隊の陣形から見ても、ヘビィ・バレリオンが大将首だ。

「ここ一番の取って置きの技でキメてやるぞ!!」

今まで以上に眩い若葉色の光りが、S・SRXに宿った。

「うわあああああつ!!」

雄叫びをあげるフェイト。

上昇するS・SRX。

そしてヘビィ・バレリオンを斜め下に捉えた。

「窮極!!スーパー!イナズマ!キイイイック!!」

ブースト降下しながら、自重も攻撃力に転化する。念動フィールドを纏った脚は集中的に念動フィールドが収束し、眩い若葉色の輝きが見えているくらいにだ。

それは若葉色の帯を引く流星のような光景だった。

迎撃するヘビィ・バレリオンだが、そのレールガンの弾丸はS・S

RXに届く事無くすべて弾かれていった。

直撃する鋼鉄の蹴り。

「うおおおおおっ！！ブチ抜けええーっ！！」

それは易々とヘビィ・バレリオンを一撃のもとに蹴り碎いた。

滑りながら着地するS-SRX。

「どんな装甲だろうと——」

立ち上がり、再び直立し腕を組む。

「蹴り破るのみ！！」

背後でヘビィ・バレリオンが爆発し、後光を浴びてその存在を誇張し強調する凶鳥。その姿は、味方には鬼神、敵には死神に見えることだろう。

第2話 極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥（後書き）

フェイト出撃の回。

アホっぽさを出すのって案外難しい。

第3話 第2の異邦人・エトランゼ・

「知らない天井だ……」

僕は確か――

ヒュッケバインもどきに乘って戦ったんだ。でも戦闘のあとに気絶しちゃったんだっけ……。

とりあえずナースコールで起きたことを伝えて、いくつかの検査を受けさせられ、軽く疲れてベッドで横になってたら、病室にレモンが入ってきた。

「調子は良さそうね、フエイト」

「検査検査検査で疲れちゃったよ」

「必要なことよ。諦めなさい」

「むう……」

「フフ」

なんだか、レモンと喋っていると、お母さんって、感じるなあ……。当たり前か、Wシリーズの生みの親だし。

——あれ？Wシリーズって、なんだろう？

えーっと――

あー！ーっ！ー！ダメダメ！断片的過ぎて何がなんだかさっぱりわからないよー！

「どうしたのフェイト？」

「な、なんでもないよレモン。それより、ここは？医務室………の感じはしないけど」

「ここは基地から少し離れた病院よ。基地の方も少くない被害を受けているから、こっちに受け入れてもらったの」

「そーなのかー」

ま、格納庫もボロボロだったんだから、基地機能の幾分かもやられちゃってもなっとくだね。うん。

「それより、アナタ、良くあのS・SRXを動かせたわね」

「うーん。なんとなく勢いに任せてやっちゃったけど、ヤバかったかなあ？」

「別に、それ程責めることはないわ。アナタのお掛けで助かったの

は事実だもの。礼を言っわ、フェイト」

「えへへっ」まあ、僕にかければチョロいチョロい！！さいきょーの僕に勝てるやつなんて居ないんだから！——一部例外アリ」

「フッフ、アナタは面白いわね、フェイト。それじゃあ、今日は安静に寝てなさいな」

「はい」

レモンが出ていった病室はシン…と静まり返ってしまった。

「暇だ——」

何となく、自分の手を見てみた。

「人……殺しちゃったんだよね……ボク」

でも罪悪感の欠片も湧かない。戦いだからと割り切れたからか、それともまだこの状況を現実として認識出来てない——わけがないつか。

「念動力か……」

念動力の使い方を知っていた僕。普通に頭に、攻撃の流れがイメージ出来た。アレは——どうしてなんだろう。

——念動力。

それは強念者の素質を秘めた人間。強念者、サイコドライバーはアカシックレコードにアクセスする力がある……か。

流石にサイコドライバーなんて公式チートは備わってないと思うけど。

「念動……集中……」

戦いの最中で得た感覚をイメージして、手に力を込めてみる。

若干手の周りが揺らめく。しかし若葉色には輝かない。

「やっぱりT・LINKシステムの補助がないとダメか……」

運が良ければ帰れる可能性もあるし、『向こう側』に行ける要素も大きくなると思ったけど。次元の壁を操る資格は、今はないらしい。

「XNディメンジョン、次元斬——か」

手に集中した念動力をX状に交差させて払う。

「いつか、やってみたいなあ……」

ドカッシャーーンッ！！！！

「わわわわわΣ！？」

いきなり病室を襲う激しい揺れと地鳴り。

病院中に警報が鳴る。

「地震！？雷！？火事！？親父iiiiiiii！！！？？」

若干パニックになりながらも、僕は部屋の窓から外を確かめた。敵襲だったらヤバイ！

でも僕の視た攻撃は、ある意味。敵襲よりもヤバかった。

「ダブルオーライザーに……ラファエルガンダムッΣ！？」

僕は窓（3階）から飛び降りて、横たわるセラフィムガンダム？の
上に飛び乗った。

ペキペキペキ

「ぐっ、ああぐっ」

セラフィムガンダム？の装甲に足を着いた瞬間。足に金属が纏わり
ついた。

「ELSまでも……ぐっ、あああああああー……っ
！！！！！」

イノベーターとして覚醒した刹那でさえ脳に損傷を負う程の情報、
意識の濁流。

それを、脳量子波ではないが、念動力者として意識を感じられるフ
イトもまた、意識の濁流に吞まれた。

それは叫びだった。

生きたいと願う生命の叫びだった。

そう、結末を知らない彼らは、人類との共存の道知らない。

なら、見せてあげる。あのあと、どうなったのか――

僕は意識の濁流に逆らうんじゃなく、身を任せた。

抗わないで、流れるまま、ELSに、人類との対話を見せる。

濁流は徐々に穏やかになり、その内、静かになった。

「もう——良いの？」

静寂になった流れに問い掛けた。

流れが、揺れた。

「そう……良かったね」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「うつ……」

眼が覚めたら、またあの天井だった。

「ゆ……め……?」

そう思ったら、微かに声が聞こえた。

人間の語源に当てはまらない声。でも確かに声だった。

「そっか、夢じゃ、ないんだね」

窓の外には半壊しているダブルオーライザーと、セラフイムガンダム?とラファエルガンダムが、セラフイムはダブルオーライザーを守りながら、ラファエルは僕の病室を見下ろしていた。

でも周りにはPTやらAMが包囲するように展開しているから、穏やかとは言い難い。

シュン――

「お目覚めはどうかしら?フェイト」

「……二日酔いから目覚めた気分だよ」

ぼんやりする頭を起こしながら、部屋に入って来たレモンへ返す。

「そう。起き上がりで悪いけれど、あの機体の事を訊いてもいいかしら？」

「うん。説明するよ」

僕はガンダムに関する部分を若干濁しながら、ELSについて語った。

何故ELSについて知っているのかは、ELSとの接触で僅かに記憶が戻り、自分は西暦2300年代の出身だからと嘘で誤魔化した。だいたい穴はあるけれど、ガンダムやELSがあるなら物的証拠としては十分だと思う。

「そう。それじゃあアレの扱いは、アナタに任せの方が良いわね」

「え？」

どういう事だろう。アレと扱いから、何となくガンダムとELSじゃないかつては察しがつくけど。

「実はアレからいくつか要求されてね。危害を加える気はない。でもこちらの言うことは聞かない。唯一フェイトは例外。無理やり退去させるなら実力行使も辞さない。随分と血の気が多い要求をね」

「そ、そうなんだ……」

理由はわからないけど、戦いになってなくて良かった。

「とりあえずは現状維持。手を出さなければ大人しくするのは本当のようだし、あとでヴィンデル——ウチの部隊の指揮官に顔出しするから、頭に入れておいて」

「わかった」

ヴィンデル——ヴィンデル・マウザー大佐。地球連邦軍特別任務実行部隊、通称シャドウミラー隊の隊長。

僕はどうなってるんだろ？

知らないはずの知識がふと頭に浮かぶのは少し混乱する。でも今はそんな不安なことも味方につけないと死ねる状況だ。

味方が……欲しいな。

色違い、性別違いのフェイト・テストロツサ。

ならなのとははやてとか居たらいいなって思う僕は、臆病者なんだろうか？

キーンッ

「え？」

ELSの声が聞こえた。

ラファエルガンダムが僕の病室に手を伸ばしてきた。

僕はベッドから出ると、窓に近寄る。

「フエイト！アナタ何を」

「大丈夫だよレモン。彼らは悪い子じゃないから」

窓から乗り出て、ラファエルガンダムの手に乗る。

そのままコックピットまで手を持って行くと、ハッチが開いた。

「まままあ……」

コックピットの中には紫色のパイロットスーツを着るガンダムマイスターが居た。

「いきてる？」

コックピットに入って、てこずりながらなんとかヘルメットを取ると、そこには眼を瞑った美女——もとい美少年。

CBのガンダムマイスター——

「ティエリア・アーデ……」

ELSによれば肉体的には生きている。でも精神的には空っぽの器。ELSの加護下——このラファエルガンダムから出してしまつと死んでしまつらしい。

「器が空っぽ……W05やW15と同じなら——」

僕はELSに協力を申し込む。彼が居れば百人力だし！

ELSを仲介して、擬似的に僕とティエリアの脳を接続——クロッシングを行う。

僕の覚えているティエリア・アーデとELSがラファエルガンダムの自爆までに写せたティエリア・アーデと掛け合わせ、ここに居るティエリア・アーデの意識を構築する。ELSの脳量子波と演算処理能力がなかったら出来ない事だった。

「あとは、目が覚めるのを待つしかないね……」

でもとりあえずラファエルとダブルオーをこのままには出来ないし、
ここ病院だし――

「ああ……簡単じゃん」

僕はもう一つELSに頼み事をした。答えはyes。

ちよつとするとラファエルのコックピットが液体金属まみれになって、それが僕の両腕に纏わりついた。すると金属は固化して籠手
に変わった。これで外見だけなら色違いフェイト・テストロッサだ。
僕はブラウニングだけ――

僕がしたことは、ELSを機体から剥がして、僕と行動を共にさせる
こと、これならラファエルもセラフィム？もダブルオーも誰が触
っても平気だ。ボクってば天才だね！！

ティエリアを背負って（結構重かった）、ラファエルの手に乗ると、
ELSがシステムに干渉して、僕達を病室まで届けてくれた。

僕はレモンに事情を話して、ティエリアも僕と同じ部屋においても
らい。3機のガンダムも、僕が立ち会うまで調べないで欲しいと頼
んだ。太陽炉の技術はちゃんと管理しないと、技術系統が違うとい
ってもとんでもないことになっちゃうかもしれないから。

レモンは少し苦笑いしてから、任せてと言ってくれた。

その内、アシュセイバーやランドグリーズ、エルアインスが3機のガンダムを回収して、ティエリアも僕の病室に移された。

ようやく気が抜けたらそのまま寝ちゃった。

第3話 第2の異邦人・エトランゼ・（後書き）

第一回目の急展開！

アホの子なのに全然アホの子にならない。これはていかに？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9347y/>

スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

2011年12月2日18時50分発行